

タイトル.. 赤く光るということ

石原 大己

【登場人物表】

岩田 久美子（37）

純の母

岩田 健司（37）

純の父

岩田 純（14）

中学二年生

浅田公子（37）

久美子の友人

兵頭先生（49）

純の担任

横山 まなみ（48）

誠の母

横山 誠（18）

高校三年生

京極 剛（18）

高校三年生

粕谷 みのり（18）

高校三年生

長井 健太郎（18）

高校三年生

大友 秀幸（37）

先生

○電車内（昼）

岩田久美子（28）と岩田純（5）がシートに座っている。

久美子の目には、純が赤く光っている。

純、久美子に甘える。

駅に着く電車。

赤く光る中年の男が入ってくる。

それ以外の乗客は赤く光っていない。

久美子「純、行くよ」

強引に純を引っ張って別の車両に移動する久美子。

久美子、純の手をひき車両を次々と移っていく。

久美子と純、後ろのほうから悲鳴声が聞こえる。

電車は緊急停止する。

車内はパニック状態に。

我先にと乗客たちが逃げて来る。

久美子「純、大丈夫だから」

純「何があったの？」

久美子「大丈夫だから」

久美子、細かく震えている。

純を抱えて、パニック状態になった車

内から外に出ようとする。

久美子M「私は将来殺人を犯す人間が赤く光って見える。後で聞いた話では、赤く光る中年は、だれかをナイフで刺し殺した。ニュースでもこの事件は取り上げられた」

久美子、純を見る。

久美子には純が赤く光って見える。

○メインタイトル「赤く光るということ」

○商店街（夜）

岩田久美子（23）が歩いている。

久美子M「赤く光って見えだしたのは、妊娠が分かってからまもなくだった」

行き交う人達に赤く光る人はいない。

赤く光るものがある。

ポスターが赤く光っている。

殺人に付随する容疑者の顔が赤く光っている。

○久美子の部屋

久美子、パソコンで検索している。

パソコンの画面には殺人 容疑者などの文字。

殺人を犯した犯罪者がのきなみ赤く光っている。

テレビで銃乱射事件の容疑者が写っている。

久美子、青ざめる。

慌てて久美子、洗面台に向けて走る。

○久美子の部屋・洗面台

久美子、急いで洗面台を見る。

久美子、自分を見る。

久美子、安堵する。

○駅

たくさんの人々が往来する。

久美子、赤く光っている人を探す。

5歳ぐらいの子供が泣いている。

子供だけが赤く光っている。

久美子M「将来の殺人者も赤く光る？」

子供、ずっと泣いている。

○路上

久美子、歩いている。

久美子、自分の膨らんだお腹を見ている。

5歳ぐらいの子供が赤く光ることがフ
ラッシュバックする。

久美子、立ち止まる。

久美子、再び歩き出す。

○久美子の部屋（夜）

久美子と浅田公子（23）が酒席を設け
ている。

公子「それにしてもおめでたい。でも久美子
が結婚していきなり妊娠なんて世の中わか

らないわ」

公子、大分酔っている。

久美子「あのさ、公子。もし生まれてくる子供が将来殺人を犯す運命にあるとしたらどうする？」

公子「なにそれ？SFホラー？」

久美子「どうする？」

公子「確率を考えるかなあ。たとえばの話だけど、車に轢かれて死ぬことなんてめちゃくちゃ確率低いじゃん。ほとんど起こらないことなら、産む。確率が高いなら諦めるかなあ。小説でも書いてんの？」

久美子「そうだよな。万が一なら気にしてもしょうがないよね」

○健司のマンション（夜）

健司が、ベビー用品をたくさん買って並べている。

それを見ている久美子。

久美子「健ちゃん、やっぱ子供が産まれて

くるの楽しみ？」

健司「最初は実感湧かなかったけど、チヨー
楽しみ。俺子供って面白いと思うんだ。個性
があってさ」

久美子「うん」

健司「少年サッカースタントコーチし
てるじゃん。俺。最初はどっか接していいかわ
からなかったんだよ。でも子供が近寄ってき
てくれてサッカーを好きになってくれて、子
供って面白いなあって」

久美子「もし私が今回、子供を見送るって言
ったら健ちゃんどうする？」

健司、真顔で振り返る。

健司「なんで？僕のこと嫌いになった？」

久美子「そうじゃなくて」

健司「じゃあなんで？」

久美子「責任をちゃんと取れるのかって」

健司「未熟だけど、俺頑張るからそんなこと
言わないで。俺、親に捨てられたじゃん」

久美子「うん」

健司「だから産まれてくる子供を絶対愛してやろうと思ってるんだ。それとも俺があいつと同じことするってこと？」

久美子「障害とかもしかしたら自分の子供が悪いくとするかもしれないじゃん。それは責任取れないじゃん」

健司「なんでそうなるの。もしそうだとしてみんなを精一杯愛すれば良いじゃないか。優秀な子供が欲しいんじゃない。俺と久美ちゃんとの子供だったらなんだって愛せるよ」

久美子「ごめん。そうだよ。試すようなことなんて言っちゃダメ」

○公園（夜）

桜が綺麗に咲いている。

久美子、それを見ている。

○駅

たくさんの人が構内を行き来する。

久美子、辺りを見ながら歩く。
赤く光っている人はいない。

○分娩室

久美子がいきんでいる。

助産師「はい。吸ってー。はいてー」

久美子、汗びっしょりで苦しそうな顔。

赤ちゃんの泣き声。

助産師「元気な男の子ですよ」

赤ちゃんを持っていく。

久美子、赤ちゃんを見る。

赤ちゃんが赤く光っている。

赤ちゃんを手渡される久美子。

久美子、赤ちゃんを強く、大事そうに

抱きしめる。

○岩田家

久美子（28）が純（5）を庭で抱きし
めている。

久美子「純、大事なことから聞いて」

純「お母さん、どうしたの？」

久美子「人間は生まれてきただけで価値がある。私は純に生まれてきてくれて本当に良かったと思うてる」

純「うん」

久美子「純が誰かを嫌いでも、その人が生まれてきてくれて良かったと思うている人が必ずいる。その言葉は覚えておいて」

○岩田家・リビング（夜）

純を囲んで久美子と健司がいる。

純、赤く光っている。

真ん中にはろうそくが5本刺さったホールケーキがある。

純、目を輝かせているいる。

健司「ろうそくの火を一気に消すんだ純」

久美子「焦らなくていいからね」

純、火を消す。

三人の笑顔。

健司「5歳の誕生日おめでとう」

久美子「純、おめでとう」

純「ありがとう」

健司、ケーキを三等分する。

健司「三等分って難しいよな」

ケーキを真っ二つにする。

久美子「あれ、三等分だね」

健司「うん」

久美子「ここからどうやって三等分するの？」

健司「分かった」

健司、4等分する。

久美子「4等分じゃん」

健司「しまった」

久美子「こうすればいい」

4つ目のケーキを三等分する久美子。

久美子「方法は必ずある」

純「お母さん、すごい」

健司「大したもんだよ。まったく」

純、赤く光っている。

愛おしそうに純を見る久美子。

純、赤く光っている。

○飲み屋（夜）

健司と伊達守（27）が酒を酌み交わしている。

伊達「岩田さん、すげー幸せそうですね」

健司「そうか」

伊達「岩田さん、すげー幸せそう」

健司「俺さ。家族作るの怖かったんだ。ちょっと家庭環境が良くなかったから。でも自分はそうならないようにって反面教師にしてみよ」

伊達「反面教師ねえ」

健司「タバコを家で吸う親がいたんだって。

そしたら子供はタバコを絶対吸わないって誓ってたんだよ。俺の友達ね」

伊達「それで？」

健司「ああそういうことなんだってな。俺は

反面教師にすればいいんじゃないかって」

伊達「そういえば二人目のお子さんは作らないんですか？」

健司「俺は良いなあと思ってるんだけど、相方がね。一人で十分って言うんだ」

伊達「そうなんです」

健司「俺は二人目欲しいんだけどね」

○道

純の手をひいて公園に向かう久美子。

公園には何人かの子供がいる。

○公園

セミの音がする。

純、砂場で山を作っている。

純と同じくらいの子供がそれを壊そうとする。

久美子、慌てて止めに入ろうとする。

純と子供、喧嘩になる。

久美子、止めることを中断して見守る。

純、相手の子供に決して暴力をふるわない。

純、砂場で山を壊されて泣いている。

純、やり返さない。

○道（夕）

純の手をひいて久美子歩く。

久美子「純、偉かった」

純、泣いている。

久美子「純、偉かった」

久美子、純の手をひいて歩く。

久美子、純を見る。

久美子「自分にこんなことが起きるなんて夢にも思わなかったな。普通だった」

○岩田家・リビング（夜）

純、リビングでくつろいでいる。

久美子、家事をしている。

健司、帰ってくる。

健司「ただいま」

久美子「おかえりなさい」

健司、純を見て驚く。

健司「純、ケガしてるじゃないか」

久美子「今日喧嘩したのよ」

健司「なんだ。そういうことか」

久美子「……」

健司「純、一発おみまいしてやったか？」

純、首を横に振る。

健司「やり返さなくてどうする？」

久美子「私の教育方針」

健司「やられたらやり返すのが喧嘩だろ？」

久美子「それはダメ」

健司「自分を守るためだろう。そうやって大人になっていくんだ」

久美子「純に暴力は覚えさせたくない」

健司「そんなの勝手に覚えてくるよ。親は全てをコントロールすることはできない」

久美子「それはわかってる。それは分かってるんだけど」

健司「理想論ではダメだよ。社会は厳しいんだ。なめられたら終わりだよ」

久美子「そうなんだけど」

健司「そうなんだよ。純、負けてもいい。気

持ちで負けるな。喧嘩して仲良くなることだ
ってある」

○公子の部屋（夜）

久美子と公子、酒を酌み交わしている。
公子、酔ってる。

久美子「子育てって難しいなあ」

公子「いやいやうらやましいよ」

久美子「なにが？」

公子「なんか久美子を見てると自分より大事
な人が出来たんだなあって思ってる」

久美子「まあ、そうかな」

公子「それって素晴らしいことだよ」

久美子「うん」

公子「すごいね。お母さんなんだね」

久美子「純は自分の命に代えても立派に育て
て見せる」

公子「でも、なんか思い詰めてるようにも見
えるんだよね。幸せそうじゃないっていうか」

久美子「それは言いすぎ」

公子「ごめん。私、うまくいってないんだ」

久美子「うまくいってないのは私もだよ」

久美子、目に涙を貯める。

公子、久美子を抱きしめる。

久美子、涙がぼろぼろとこぼれてくる。

公子、久美子の背中をさする。

公子「なんで人生って安全圏が無いんだろう
ね」

○保育園

赤く光っている純。

大勢の子供がいる。

赤く光っているのは純だけ。

それを遠くから見ている久美子。

○道

純と久美子歩いている。

久美子、よろよろ歩いている。

車道には、車がたくさん通っている。

久美子、純の手を引き吸い寄せられる

ように車道に近づく。

車のクラクションの音。

車が急停車して、運転手がどなる。

久美子、純、茫然としている。

車が去る。

何事も無かったかのように久美子、純の手をひきとぼとぼと歩く。

○岩田家・リビング

純が久美子の顔色を伺っている。

純「お母さん。僕いっぱい勉強して頑張るから、心配しないで」

久美子「うん」

純「お母さん、僕頑張るから」

久美子、涙ぐむ。

久美子「お母さんもなんとかして見せるから」

○久美子の部屋

パソコンを見てる久美子。

殺人鬼は誰かを4択の写真から選ぶク

イズを見ている。

4人の中から一人だけ赤く光る。

久美子、三門目まで赤く光る写真を選んで連続正解していく。

4問目の写真。

赤く光る写真にカーソルを合わせる久美子。

わざとカーソルを外して赤く光っていない写真を選択する久美子。

不正解のPC表示。

久美子、無表情。

○駅

大勢の人が構内を行き来している。

久美子、辺りをきょろきょろしている。

ヤクザ風の男たちが通りかかる。

赤く光っていないヤクザたち。

久美子、赤く光る女性を見つける。

赤く光る危険を感じない女性。

久美子、赤く光る女性の跡をつける。

赤く光る女性にじよじよに追いつく久美子。

久美子、赤く光る女性に追いつく。

久美子「すいません。道に迷ってしまっ

女性A「どうされました？」

久美子「イーストサクセスホテルに行きたいのですが」

女性A「イーストサクセスホテルだとちょっとややこしいですね。一緒に行きますか？」

久美子「是非、お願いします」

女性A「では一緒に行きましょう」

久美子と女性A並んで歩く。

女性A「ここらあたりは初めてですか？」

久美子「そう……ですね」

女性A「ここらあたり線路があるから、道が

複雑なんですよ」

久美子「そうなんです」

女性A「そうなんです。ここらあたりに住んでるんですけど、けっこう迷ってる人があるみたいで、前も案内しました」

久美子「おやさしいんですね」

女性A「いや、休みの日だったんでまあ。でも今日みたいな日に外に出ちゃだめですよ」

久美子「本当に暑いですよね」

女性A「日本ってこんな暑かったっけな」

久美子「はい」

歩道橋を渡る久美子と女性A。

女性A「線路があるから向こう側に行くのがややこしいですよね」

久美子「ありがとうございます。こんなことまでしていただいて」

女性A「イーストサクセスホテルまでもうすぐですよ」

久美子「ありがとうございます」

○イーストサクセスホテル前。

久美子と女性Aがホテル前に着く。

久美子「ありがとうございました」

女性A「いえいえ今日は暇でしたから」

久美子「あの、ちょっと聞いていいですか？」

女性A「はい」

久美子「やっぱり良いです。本当にありがとうございます
うございました」

女性A「そうですか。分からないことがあったらフロントに聞くのが一番ですよ。プロですから」

女性A、去っていく。

女性Aの赤く光る姿を目でずっと追っている久美子。

○庭（昼）

岩田純（10）が水遊びしてる。

久美子（33）が見守る。

水鉄砲で久美子を射撃する。

久美子も純も笑っている。

健司（33）も遅れて見守りにくる。

久美子「水かけないで」

純、ニコニコしている。

健司「あっという間に10歳かあ」

久美子「そうね。私もちよっとずつ歳とっ

てるんだろうなあ。いつまでも若いと思っ
てるけどさ」

健司「本当そう」

久美子「優しい子に育って欲しいね」

健司「純はなんになりたいんだろうなあ。聞
いたことあるけどお笑い芸人なんだってさ」

久美子「あら、そうなの？」

健司「うん。聞いてなかった？」

久美子「聞いてない」

健司「なんでか？って聞いたら人が笑うと安
心するってさ。でもお笑い芸人なんて凄い大
変だし、ヤクザな道だしな」

久美子「人が笑う顔が好きか」

健司「純は成績も良いし、クラスの人気者み
たいでな。女の子にもモテるらしい」

久美子「兵頭先生からそれは聞いたけど」

健司「とんびが鷹を産んだとはこのことだな」

久美子「うん」

健司「どうした？うれしくないのか？」

久美子「うれしいよ」

健司「嬉しい時は力いっぱい喜ぶもんだ」

久美子「そうだね」

健司「うん」

久美子「私、お父さんのそういうところ好き」

純、ニコニコして水遊びをする。

太陽が光っている。

久美子の目からは、赤く光る純が見える。

○岩田家・リビング（夜）

岩田純（14）が岩田健司（37）とど
なっている。

健司「そんなに文句があるんだったら殴って
みろ」

純、拳を握りしめる。

健司「お母さんが言うから殴れないのか。こ
の弱虫が」

純「くそ」

健司「悪態はつけるんだな」

純「……」

岩田久美子（37）が飛び込んでくる。

久美子「純。それで良い」

健司「弱虫が」

久美子「弱虫じゃない」

健司「いいや。弱虫だね」

健司、リビングから出ていく。

純、怒りで震えている。

久美子が純を抱きしめる。

久美子「偉かった」

純、久美子からは赤く光ってみえる。

久美子「なにがあつたの？」

純「お父さんは僕のことを理解しようとしな
い」

久美子「理解できるから一緒にいるんじゃないの」

純「それはわかってるけど」

久美子「お父さんは、純とどう接していいか
わからないの」

純「でも」

久美子「お父さんだって、もちろん純だって
発展途上なんだよ。私だって」

○純の部屋（夜）

純、一生懸命勉強してる。

久美子、ノックする。

久美子「入っていい？」

純「どうぞ」

久美子、入ってくる。

純「どうしたの？」

久美子「これからどんなことがあっても純が生まれてきてよかったと思ってる」

純「なんだよ？母さん」

久美子「お父さんとうまくいってないみたいだけど」

純「ああ。お父さんは良い人だと思ってるよ」
久美子「うん」

純「でもやり方が強引ていうか俺の気持ちを考えてると思えないんだよ」

久美子「お父さんは、知ってると思うけど、お父さんのお父さんに大事にしてもらえなかったの。でも誰よりも純を大事にしてる

のは間違えない」

純「うーん」

久美子「それは分かってあげて」

純「でもお母さんを褒めるわけじゃないけど、お母さんは僕を魂から愛してるって感じがするんだ。お父さんは苛立ってるって感じがする」

久美子「……」

○久美子の部屋（夜）

久美子の携帯電話が鳴る。

久美子「もしもし。純が喧嘩。はい。すぐ向かいます」

○中学校生徒指導室（夜）

兵頭公男（49）と純が向かい合って座っている。

久美子、ぺこぺこしながら入ってくる。

久美子「すみません」

兵頭「純君のお母さま。純君は一方的に相手

の子を殴り続けました」

久美子「……」

兵頭「純君はクラスで人気があり成績も優秀で人柄も良い。でも加減というものが分かってない」

久美子「純が暴力をふるうことはいままで」

兵頭「一度もありません。でも正直なところ相手の子がもしかしたら死んでたかもしれない」

久美子「大げさでは？」

兵頭「骨折してます。顔もひどいことになってる。加減ってものがあります」

久美子「純、本当なの？」

純、拳が真っ赤。

純、うなづく。

久美子「どんなことがあっても暴力はダメだって言ったよね」

純「お父さんはその逆を言う。どっちを信じろって言うんだ。お父さんの言う通り、自己防衛は必要だ。それだけ」

久美子「とにかく暴力は絶対だめ」

純「じゃあなんで暴力はだめか教えてくれよ」

久美子「相手を傷つけることは自分を傷つけることと同じだよ」

純「じゃあ今まで通りやられっぱなしでいろってこと？俺は悪くないのに」

兵頭「お母さまになんて口聞くんだ」

久美子「良いんです」

純「俺は俺の考えが大事にしたい。お母さんの考え方は現実には即してない。つまり理想論だよ」

○岩田家・寝室（夜）

久美子と健司が寝ている。

久美子「純は暴力をたぶん初めてふるった」

健司「ちよつとやりすぎだとは思うけど、自分を守るためだ。仕方がない」

久美子「暴力は絶対にだめと教えてきた」

健司「久美子は優しいから」

久美子「エスカレートしなきゃいいんだけど」

健司「俺さ、あいつに殴られてもニコニコしてた。だから今回のことは悪いとは思うけど、ごめん。やっぱり自分を守るためには仕方がない部分はあると思う」

久美子「……」

○久美子の部屋

久美子、携帯電話を見る。

兵頭の文字。

久美子「はい。もしもし。そうですか」

○生徒指導室

兵頭が窓から空を見ている。

純、黙って下を見ている。

久美子、入ってくる。

兵頭「単刀直入に言います。相手を半殺しにしました。止めなかったらどうなったか」
久美子「すいません。そうですか」

兵頭「暴力はよくない。というかこれだけのことを二度もしてこの学校にいれるってい

うのは僕は違うと思うんです」

久美子「真にもうしわけありませんでした」

兵頭「一回なら許されました。でも間をおかず
に二回ありました」

純「じゃあどうすれば良かったんですか？」

兵頭「話し合うこともできたはずだ」

久美子「……」

純「いままでさんざん話し合ってきて解決し
なかった。一回警告してそれでも収まらな
かった。僕は自分を守るためにしかたがな
かつたんです」

久美子「すみませんでした」

兵頭「お母さま。さっきからすいません
すいませんとおっしゃってますがね。責任は
とれるんですか？」

久美子「そうですね。責任はいつでも取る
つもりでいましたから」

兵頭「でしたら退学も視野に検討すること
もご理解頂けますね」

久美子「はい。責任は私が取ります」

兵頭「相手方の心の傷を考えたことがありますか？」

久美子「あります」

兵頭「でしたらこれが問題であることぐらいわかりますよね」

久美子「十分わかっているつもりです」

兵頭「分かっていただけなら」

久美子「純と私で二人にしばらくしていただけますか？」

兵頭「もちろん。でも厳しい判断が下されることは覚悟してください」

○岩田家・リビング（夜）

健司、座っている。

純、入ってくる。

健司「純。今回したこと何が悪かったか分かるか？」

純「暴力をふるったこと」

健司「そうだな。でもそれだけじゃない」

純「お父さんはやり返せて」

健司「それにも限度があるだろう」

久美子が入ってくる。

久美子「お父さん、私は疲れた」

健司「なにが？」

久美子「私は純を愛してる」

健司「俺も愛してる」

久美子「私は私の運命に疲れた」

久美子、疲れ切った顔で出ていく。

健司「おい。どういふことなんだ？」

純「……」

健司「久美子はちょっと純に対して深刻になりすぎるところがある」

純「……」

健司「俺も親に捨てられて荒れてた時期があった。ただ目立ちたかった。散々悪さしたよ。でもな、そんな自分が今は恥ずかしい。お前を愛して愛して愛し抜きたい。純、ごめんよ。俺がダメなばかりに」

健司、涙を目にためる。

純、うんうんと頷く。

純「お父さん。いままでごめん」

健司「いいんだ。いいんだ」

健司、涙が止まらない。

健司「お父さんはお前を愛してる。お母さんもお前を愛してる。あいつみたいには絶対ならない。俺みたいには絶対させないからな」

○岩田家・寝室（夜）

久美子が寝ている。

健司入って来る。

健司「久美子寝てるか？」

久美子「いや」

健司「今回のことで、純とやっと話せた」

久美子「良かったね」

健司「純は立派に育てるよ」

久美子「でも暴力をふるった」

健司「俺だって暴力をふるったことがある」

久美子「私の母親は、一回は許してくれた。

二回めは許してくれなかった。なんでか分

かった気がする」

健司「なに言ってるんだ。お前。純は14歳だぞ。過ちを犯すことだってある」

久美子「赤く光るといふことは、どうかして
るってことなんだと思う」

健司「お前、疲れてるんだよ」

久美子「純を連れて仲直りのための旅行に行
こうと思うんだけど」

健司「俺も行くよ」

久美子「あなたは仕事がある。二人で話した
い。今回はそういうことでお願い。許して」

健司「……電気消すぞ」

電気が消える。

○分娩室・回想

赤ん坊の純が赤く光っている。

久美子、純を強く抱きしめる。

○電車内（回想）

中年の男が赤く光っている。

それ以外の乗客は赤く光っていない。

○テレビ（回想）

殺人犯の男が赤く光っている。

○パソコン（回想）

指名手配犯の殺人容疑の人達が赤く光っている。

○庭（回想）

純が笑顔でこっちを見ている。

うずくまって号泣する久美子。

様々な殺人者の写真がオーバーラップする。

14年の様々な純がオーバーラップして画面を埋め尽くす。

全て赤く光っている純。

○岩田家・リビング（昼）

スーツケースにものを詰め込む久美子。

リュックサックを背負う純。

久美子「仲直りのための旅行。行くよね」

純「本当に行かなきゃだめかな？」

久美子「反省してる？」

純「反省はしてるよ」

久美子「二度と暴力は奮わないと誓える？」

純「それは誓えない。お父さんの言う通り、

社会はそんなに甘くない。お母さんが暴力を嫌う気持ちは分かるけど、ちよつと異常だよ」

久美子「純」

純「僕はお母さんが心配してる姿を見せたくないから良い子にしてた。いつもお母さん、心配してた。幸せそうじゃなかった。疲れていた。それは今も変わらない。僕は立派な大人になってみせる。お母さん、だからもう俺に構わないで」

○カフェ

公子と久美子向かい合っている。

コーヒーが二つ。

公子「コーヒー冷めるよ」

久美子「うん」

公子「どうしたの？親友じゃない」

久美子「ありがとう。親友だよね」

公子「私はここまで結婚せずにきた」

久美子「うん」

公子「結婚して幸せだった？」

久美子「もちろん。結婚して良かった」

公子「なんだそれ。惚気か？」

久美子「そうだね」

久美子、笑う。

公子「良いじゃん。なんか吹っ切れたみたい」

久美子「うん。吹っ切れた。私はたぶんもう

後悔しない」

公子「久美子、いままでにないぐらい幸せそ

うだね。どうしたの？」

久美子「私なりの答えがようやく出せた」

公子「良かったじゃん」

久美子「公子、幸せになって。結婚も人生も

悪いもんじゃない」

公子「悪いもんだって一言も言っていないので
すけど」

公子、おどける。

久美子、笑う。

公子「そういや純君は思春期まっただなか？」

久美子「うん」

公子「思春期は自立のために必要なのだ」

久美子「分かってる」

公子「だからあんまり悩むんじゃない」

久美子「公子。幸せになるのに道が一つではない。幸せになるのはその人の数だけある。だからこそ、私は公子に出会えて良かった。私がつらかった時、なぐさめてくれたことを忘れない。絶対忘れない」

コーヒーを飲む公子。

公子「まるで最後みたいだね。ライン消すと

か音信不通とかやめてよ」

久美子「そんなことしない」

公子「だったらそれでいいんだけど」

久美子「公子のおかげで純を産む勇気を持って

た」

公子「それは久美子のおかげで私のおかげじゃない」

久美子「そうかな」

公子「そんなこと言うんだったら良い男紹介しろ。私だってまだ結婚諦めてないし」

久美子、一拍間を置く。

久美子「良い人がいたら紹介する」

公子、喜ぶ。

公子「持つべきものは親友よ。私が自分で選んだ男は、はずればっかりよ。男を見る目が絶望的に終わってる」

久美子「そこが公子の良いところじゃん？」

公子「どこが？どこが？」

○駅

改札越しに公子と久美子向かい合っている。

久美子「今日はありがとう」

公子「良い男紹介してよ」

久美子「絶対紹介する」

公子「期待してるから」

久美子、階段を下りる。

久美子、ホームに上っていく。

公子、その姿をずっと見ている。

○バスの車内（夜）

海岸が見えてくる。

久美子と純、二人寄り添って座る。

純「お母さんどこ行くの？」

久美子「……」

純「どうしたの？」

久美子「お母さんはね。14年間ずっと純の将来を考えてたの。たぶんこの決断は多くの人には理解されない。でも良いの。私はこの問題に対して一番悩んだ自信がある」

純「何を言ってるの？お母さん。確かに暴力をふるったのは悪かったと思ってるよ。でも気にしすぎだよ」

久美子「純には私の気持ちは分からない」

純「わかるよ」

久美子「人は理解できなくても人を大切にすることが出来る。この気持ちは私にしか分からない」

○旅館（夜）

純が寝ている。

久美子、横で寝ている。

久美子「純、起きてる？」

純「起きてる」

久美子「純が生まれてきたことで私が生きる価値があった」

純「うん」

久美子「私は純が優しい子でいてほしい。ましてや他人を殺して欲しくない」

純「前のことは謝るよ。でも殺人なんて僕はしない。あの時もするつもりはなかった」

久美子「私は純を愛してる」

純「僕も母さんが好きだ」

久美子「明日は名所に行ってみよう」

純「どこ？」

久美子「崖があるんだけど、怖くないから」

純「そんなところになんで」

久美子「……」

純「……」

○崖

久美子と純、崖にいる。

純、怖がっている。

久美子、崖の端まで来ている。

純「お母さん、危ない」

久美子「危ないなら、ここまで来て」

純、怯えながら久美子に近づく。

純、久美子に手を差し出す。

久美子、純の手を引っ張る。

純「お母さん、どうしたの？」

久美子「お母さんよく考えたの」

純「なにを？」

久美子「純、一緒に行こう。これは前向きな

決断なの」

純「なにを言ってるんだよ」

久美子「あなたは本当に良い子だった」

純「良い子ってこれからも頑張るから」

久美子、純に抱きつく。

純、避ける。

久美子、純にしがみつく。

久美子「純。大事なことでかしつかり聞きなさい。あなたは殺人者にはならない。私が望んであなたの罪を被る。純。幸せになって」

純、久美子を押す形になる。

純「お母さんなんで？」

純、久美子から離れようとした時、久美子が崖から落ちていく。

純、落ちていく久美子を見ている。

純「なんで？お母さん。なんで？」

純、崩れ落ちた姿。

○ニュース映像

崖を映し出している。

空から崖を空撮している画像。

キャスター「親子で出かけた幸せな旅が悲劇
となりました。母親は息子をかばって崖から
落ちたそうです。なお事件性はない模様です」

○葬儀会場

純と健司が憔悴している。

健司「大丈夫だから。大丈夫だから」

純「……」

健司「純。大丈夫だから」

純、涙をこらえる。

健司「……」

泣き崩れる健司。

純、涙をこらえている。

○岩田家

夕食がテーブルに並ぶ。

健司と純が向かい合って座っている。

健司「俺は間違っていたかもしれない」

純「なにが？」

健司「久美子の考えが分からなかった。でも

尊重すべきだった」

純「どういうこと？」

健司「母さんは死ぬまで暴力に反対だった。

でも俺は自分の正義を貫いた」

純「母さんはずっと暴力を反対してた」

健司「純。暴力はいけないのかもしれない」

純「うん」

健司「久美子に、久美ちゃんが大事にしてたことを俺は大切に出来なかった」

健司、嗚咽して泣きだす。

健司「久美ちゃん、ごめん。これじゃあいつと同じだ」

純、健司を抱きしめる。

純「俺、間違ってた。お母さんが大事にしたこともう一度ちゃんと考えてみるよ」

健司「俺もちゃんと考えてみる」

純「お父さん、俺立派な人間になるから」

健司、泣きながら

健司「ならなくていい。お前が生きていくれたらそれでいい。お父さんも久美ちゃんも

お前のことが大好きだ」

純、涙をためる。

純「俺、立派な人間になるから」

健司、嗚咽して泣く。

夕食を食べだす純。

純「お父さん、美味しい」

健司「そんなことないだろう」

純「おいしい」

健司「お母さんよりうまく作れなくてごめんな」

純、がつがつ夕食を食べる。

純「こういうときは笑うだよ」

健司、泣き笑い。

純「お母さんの笑顔が好きだった。お父さんの笑ってる姿も僕はすごく好きだよ」

健司「そうか」

健司、無理矢理笑う。

純、満面の笑み。

○タイトル「3年後」

○坂

岩田純（17）が自転車を漕いでいる。
坂を全速力で駆け上がる。

○坂の頂上

純、坂を上りきる。
坂を振り返る純。
街が一望できる。

純はその景色を見ている。

純「よし」

純、自転車を漕ぎだす。
純、真顔に戻り、悲しそうな顔をする。
純、それに気づき作り笑顔をする。
自転車のペダルを踏む純。
背中越しに純と自転車が映る

○とある駅・ホーム

電車がやって来る。
電車がホームで止まる。

横山誠（18）が電車から降りる。

あたりをきよろきよろする。

誠M「殺人鬼とすれ違う回数は、一生のうちに平均15回ぐらいだそうだ。ネットで調べた雑学」

誠、改札に向かって歩く。

その道中、たくさんの人達が歩いていく。

○とある駅・改札

誠が改札を通る。

○南武高校・三年一組（回想）

誠M「ある日。赤く見えだしたのは突然だった」

三年一組のネームプレート。

ホームルームが終わって帰ろうとする

生徒達。

京極剛（18）が帰ろうとする。

京極、赤く光っている。

赤く光る京極を見る誠。

誠「あのさあ、お前さ今日」

京極「なんだよ」

誠「いや、なんでもない」

京極「なんでもないのか」

誠、首をかしげる。

京極「気持ち悪いな」

京極、席を立つ。

誠を一瞥する。

京極、帰っていく。

誠M「この時、京極が赤く光っている理由が分からなかった」

○南武高校・廊下

たくさんの生徒達が帰路に向かう。

赤く光る人は京極以外見当たらない。

○とある駅・ホーム（回想戻り）

歩いている誠。

首をかしげる誠。

遠くで赤く光るもの。

それに吸い寄せられるように近づく誠。

ポスターが赤く光る。

指名手配犯の顔が赤く光っている。

『殺人』の文字。

首をかしげる誠。

○誠の家・リビング

リビングに座ってリモコンの電源を入れる誠。

テレビを見る誠。

幼い義理の息子を殺した殺人者の報道が流れる。

護送される殺人者の顔。

容疑者が赤く光っている。

チャンネルを変える誠。

アメリカの銃乱射事件の容疑者が、赤く光っている。

誠、青ざめている。

誠、自分の部屋に向かって走る。

○誠の家・誠の部屋

スマホをいじる誠。

検索サイトで指名手配犯と打ち込む。

指名手配犯の顔が赤く光っている。

身長172cmぐらい、殺人。

身長175cmぐらい、殺人。

殺人の文字に付随する写真だけ赤く光る。

『あなたの近くにいませんか。犯罪捜査にご協力を。どんな小さな情報でもお寄せ下さい』の文字。

誠のマウスを握る手、震えている。

誠「京極：」

○とある駅・改札

走ってきて改札を見渡す誠。

たくさんの人が歩いている。

赤く光る人が一人だけ。

誠、慎重に歩く。

指名手配犯達の顔写真とは別人。

誠M「殺人鬼とすれ違う回数は、一生のうちに平均15回ぐらいだそうだ。ネットで調べた。もう二回」

誠M「京極は人殺し？赤く光る人の共通点、殺人、殺人」

大勢の人が行き交う。

誠、5歳ぐらいの子供が赤く光るのを見る。

無邪気に母親に付いて行く5歳ぐらいの赤く光る子供。
なにかに気付く顔。

誠M「殺人を犯す運命にある人も赤く光る？」

○とある駅・公衆便所

急いで入ってくる誠。

鏡に一直線。

鏡で自分を見る。

赤く光っていない。

安心した表情の誠。

思い出したかのように、スマホの自分の
写真を見る誠。

安堵の表情の誠。

○誠の家・リビング（夜）

ドアの音がする。

入ってくる横山まなみ（48）。

赤く光っていない。

安堵の表情で、

誠「おかえり」

まなみ「どうしたんよ？」

誠「なにが？」

まなみ「そんな顔して」

誠「別になんでもない」

まなみ「：そうか」

誠「指定校推薦なんとももらえそう」

手を叩いて喜ぶまなみ。

誠「出席日数さえ後、ちゃんとしてれば」

まなみ「そうか。風邪ひかないようにしなきゃね。高一から頑張ってきたもんね。お母

さん、嬉しいわ」

誠「…」

まなみ「頑張ってたもんね」

誠「…これからも頑張るから、お母さん安心してな。心配せんでいいから」

誠、席を立つ。

まなみ「ご飯、良いの？」

誠「食欲なくて。珍しく」

まなみ「珍しい」

誠、席を立つ。

誠、出て行く直前、振り返る。

誠「あのさ、お母さん。殺人を犯した人に価値ってあるんかな」

まなみ「どうしたんよ。急に」

誠「俺は無いと思う。迷惑かけたんだから」
まなみ「…」

誠、リビングから出ていく。

まなみ、思い詰めた表情。

○南武高校・下駄箱（朝）

横山と書かれたネームプレート。

ロッカーはボコボコに壊れている。

ため息をつく誠。

別のネームプレートが入っていないロッカー。

南京錠をはずして開く。

靴を履き替える誠。

三年一組の教室までの道中、長井健太郎

(18)とすれ違う。

長井は赤く光っていない。

すれ違い様、

長井「キモッ」

誠、平静を装い無視。

振り返って誠の背中を見て嘲笑う長井。

○南武高校・三年一組(朝)

誠、恐る恐る入ってくる。

京極、自分の席で友達と談笑している。

京極、赤く光っている。

誠、冷静を装い自分の席に着席。

× × ×

授業中の風景。

京極、赤く光っているまま。

× × ×

弁当の時間。生徒達が仲良しグループに分かれて弁当を食べている。

誠、自分の席で弁当を食べようとする。

京極「おい。水臭いな」

誠、ビクツとする。

京極、かまわず椅子を持ってきて、誠の席に自分の弁当を置く。

誠「ごめん」

京極、赤く光っている。

京極「すぐ謝るなよ。それお前の悪い癖」

誠「うん」

沈黙。

京極「お前、今日なんかおかしいぞ」

誠「そんなことないよ」

京極「なんかあったんか」

誠「なにも無いよ。いつも通り」

京極「相談してくれよ。力になれることかも
しれないだろが」

誠「だからなにも無いって」

○南武高校・二年一組（回想）

二年一組のネームプレート。

掃除の時間。

ほうきで床を綺麗にしている誠。

誠に女Aが近寄ってくる。

女A「横山君、あの」

誠、ドギマギする。

女A「横山君、あのね」

誠「なに」

女A、誠から去って女グループに混ざ
る。

女A「めっちゃキモかった。もう私」

女グループみんな笑っている。

女A「じゃんけん弱い自分を呪うわ」

誠、平静を装う。

ほうきで床を綺麗にする誠。

誠M「罰ゲームになるぐらい僕のカーストは低かった」

すごい剣幕で京極、女グループに近づく。

京極、赤く光っていない。

京極「お前ら、最低！」

女グループ驚く。

女A「京極君。違うの。これは罰ゲームで」

京極「お前ら、次こんなことやってみろ。ゆるさんからな」

京極、誠に近づき肩をポンとする。

京極「お前、優しすぎるよ」

京極、去っていく。

○南武高校・三年一組（回想戻り）

弁当を食べている誠と京極。

誠M「どこまでもカッコいい奴。それが京極」

京極、赤く光っている。

京極「お前、やっぱおかしいよ。なんかよそよそしい」

誠「今日、ちょっと調子悪いんだ。ごめん」

京極「そうか、確かに食欲もないもんな」

誠の弁当、ほとんど手をつけていない。

誠、箸を持つ手、震えている。

京極「大丈夫か」

箸を置き、手を隠す誠。

誠「大丈夫」

○電車内

誠が乗っている。

あたりには赤く光っている人いない。

誠、きよろきよろしている。

挙動不審の男が乗客に話しかけている。

男A「あなたに財産をあげます」

気味悪がって乗客、男Aを避ける。

男A、赤く光っていない。

男A、誠に近づく。

誠の周辺の乗客ちりぢりになる。

男A「あなたに財産をあげます」

誠「ありがとうございます…でも今は忙しい

んで」

男A、違う乗客に向かっていく。
誠、その男Aを怖がらない。

○とある駅・ホーム

電車から降りる誠。
たくさんの人が往来している。
赤く光る人はいない。

○誠の家・誠の部屋

ベッドに寝転がる誠。
電灯を見る誠。

スマホをいじる誠。
検索履歴には殺人者、殺人者 顔相
など殺人関連がズラッと並んでいる。

○誠の家・台所

夕食の準備をしているまなみ。
誠「今日はシチューか」

まなみ、誠に背を向けながら、

まなみ「前、言っただけなんだけどね」

誠「推薦のこと。大丈夫」

まなみ「そうじゃなくて」

まなみ、振り返る。

まなみ、しばらく沈黙。

まなみ「人間はな。生まれてきただけで価値がある」

誠「殺人した人にはいえない」

まなみ「たとえ殺人してしまったとしても、価値がある」

誠「そんな。殺された人はたまったもんじゃない。そんな考え方あり得ない。あんなもんはエラーだ。ゴミだ」

まなみ「人間は生まれてきただけで価値がある。たとえ殺人を犯しても生きて償う。それぞれ事情つもんがあるんよ」

誠「そんなことお母さんが言うと思わなかったわ。迷惑かけたらいかんが口癖の」

まなみ「あんたが私の生き甲斐なんよ。そんなこと言わないで。もうこの話はやめよ」

誠、拳を握りしめる。

誠「今日、飯いらんわ。外で食べる」

誠、怒って出ていく。

○道（夜）

繁華街を歩く誠。

たくさんの人が往来している。

赤い人は見当たらない。

粕谷みのり（18）がファミレスに入っ
ていく。

誠、それを遠くから見ている。

ファミレスの奥で赤く光っている人。

誠、呼び止めようとする。

みのり、気づかず入っていく。

誠「粕谷さん」

叫ぶ誠。

みのり、気づかない。

誠、躊躇する。

誠、ファミレスに入っていく。

○ファミレス（夜）

みのり、どんどん赤く光っているほうに
近づいていく。

誠「粕谷さん」

喧噪で声がかき消される。

みのり赤く光っているほうに近づく。

赤く光る席につくみのり。

誠、躊躇する。

誠、死角にいる赤く光る席に近づく。

誠、赤く光る人の顔を見る。

京極。

京極と誠、目が合う。

誠に驚く京極。

京極「：調子は大丈夫か」

みのりと京極バツが悪そう。

みのり「あのね。京極君が言うなって言うか
らずっと隠してたんだけど」

京極「いや、そこまで」

みのり「私たち、付き合ってるんだ」

京極、ため息をつく。

誠、冷静を装う。

誠「そうか。京極なんでも言ってくれなかっただよ」

頭をかく京極。

誠「お幸せに。調子は大丈夫」

逃げるように去る誠。

早歩きでファミレスを出ていく誠。

誠がファミレスを出たのを確認して、

京極「お前、言うなっっていってたのに」

みのり「言いたかったんだもん。でもなんで

横山君にだけは言っちゃだめだったの」

京極「お前、男心が分かってないよ」

みのり、不思議そうな顔をする。

京極、赤く光っている。

○道（夜）

暗い夜道を早歩きする誠。

誠「人殺し」

思わずつぶやく誠。

○誠の家・玄関（夜）

誠、ドアを開ける。

静かに入っていく。

○誠の家・リビング（夜）

シチューと野菜が置いてある。

『温めて食べて下さい』の書置き。

○誠の家・台所（夜）

シチューが電子レンジで回っている。

それをじっと見ている誠。

○誠の家・リビング（夜）

誠、シチューと野菜を食べる。

ごはんをかきいれる。

誠「…うまい」

少し、笑う。

誠「こんな時でも」

シチューを食べる。

○山（朝）

誠とまなみ、山を登っている。

誠、苦しそう。

まなみ、平気。

まなみ「あんた、高校生なんだから、もうちよっと体力あるでしょ」

誠「お母さんが無敵すぎるんだよ」

まなみ「運動不足すぎるんよ。誠は。健康な精神は健康な肉体に宿る」

息をきらしながら、

誠「分かってるよ。何回同じこと言う」

まなみ、先をどんどん歩く。

誠「ちよっと待って」

まなみ、振り返る

誠「良いことってこの先あるのかな」

まなみ「いっぱいあるよ。基本、苦しいけどな」

誠「うん」

まなみ「基本は苦しい」

誠「高校入った時、これで変わるかなと思っ

た。変わらんかった」

まなみ「うん」

誠「大学行ったら変わるかな」

まなみ「変わる。変えたいと思う限り変わる」

誠「自信満々でよく言うよな」

まなみ「だってそうだもん」

誠「変えたいなあ」

まなみ、笑う。

まなみ「ほら、行くよ」

誠、慌てて付いていく。

○山・頂上（朝）

まなみ、誠を待っている。

誠「はあ、着いた」

まなみ「ボロボロじゃん」

誠、へたり込む。

まなみ、手を合わせて拝む。

まなみ「よしっ」

誠「よしって」

まなみ「あんたも拝んどき。自然に触れるっ

てことはものさしを確認することだから」

誠「意味わからん」

まなみ「自然は平等なんよ」

誠「よくわからんなあ。じゃあ人間は」

まなみ、手を合わせて山に拝む

まなみ「平等だったら良いのにね」

誠を見るまなみ。

誠「俺は山には頼らん」

誠、山をじっと見ている。

○駅（夜）

雨が降っている。

長井が傘を二つ持っている。

京極、長井を見て物陰に隠れる。

駅から長井の妹らしき女が出てくる。

長井、優しい笑顔。

長井、女に傘を渡す。

2つの傘が、駅から遠ざかっていく。

○南武高校・三年一組（朝）

ネームプレートに三年一組。

誠、入ってくる。

京極、赤く光っている。

誠、自分の席に着く。

京極、バツが悪そう。

誠、文庫本を読み始める。

みのり、京極の様子を見ている。

○南武高校・トイレ

トイレに入っていく誠。

長井がいる。

長井、赤く光っていない。

すれ違いざま、

長井「キモッ」

長井、振り向いて笑う。

誠、辺りを確認する。

長井以外誰もいない。

拳が飛んでくる。

誠の拳。

長井、倒れる。

誠、それを見て立ち去る。

長井、顔面を抑えている。

長井、もんどり打って苦しむ。

○南武高校・生徒指導室

窓の景色を見ている大友秀幸（37）

誠、椅子に座っている。

大友「今日、天気良いなあ」

誠「はい」

大友「なんで長井を殴ったんだ」

誠「なんでって」

大友「そうそう」

誠「正当防衛です。殴られそうになったから」

大友「にしても優等生のお前がさ」

誠「そんなことないです」

大友「今日、天気良いなあ」

誠「正当防衛です。…あんなもん怖くないんですよ。本物に比べたら」

大友、誠の方を向く。

大友「本物って」

誠「本物は本物です。でもすいませんでした」

大友「そうか。内々に今回は済ませる。でも

お前みたいな優等生がなあ」

窓の方を再び向く大友。

大友「今日は天気良いなあ」

頭を下げて誠、出ていく。

○南武高校・三年一組

誠、入ってくる。

生徒達どよめいている。

誠、自分の席に着く。

誠、文庫本『罪と罰』を読み始める。

○誠の家・リビング（夜）

まなみ、テレビを見ている。

高校生が殺人を犯した報道。

食い入るように見ている。

誠、入ってくる。

慌ててテレビのチャンネルを変えるま

なみ

まなみ「おかえり」

誠「ただいま」。

誠、自分の部屋に行こうとする。

まなみ「待ちなさい」

誠、振り返る。

まなみ「先生から連絡あつて」

誠「そのことか」

テレビを消すまなみ。

まなみ「暴力はだめって言ったよね」

誠「変えたんだ。いや変わって、変わったというか」

まなみ「なにを言ってるの」

首をかしげるまなみ。

誠「長井ってやつは一年の時からずっと俺を

いじめてたんだよ。お母さん」

まなみ「なんで言ってくれなかったの。でもだからって」

誠「俺はもううんざりだから変わったんだと思う」

まなみ「あんた、なにを言ってるの」

誠「学校は行くよ。自分の将来のために」
まなみ「そういうことを言ってるんじゃない」
誠「じゃあどうすればよかったんだよ」

怒鳴る誠。

まなみ、少し後ずさる。

誠「ごめん。でも悪いと思ってないから」
誠、出ていく。

まなみ、険しい表情。

誠の家・誠の部屋（夜）

ベッドで寝転がっている誠。

目を閉じて笑みを浮かべている。

○南武高校・三年一組（朝）

誠、入ってくる。

京極、赤く光っている。

京極、誠に近づく。

誠、自分の席に着席。

京極、近づく。

京極「…ごめん」

誠、京極にビビる。

京極「俺、お前を大事な親友だと思ってる。

だから言えなかった」

誠「ああ、あのことか」

京極「そう。そのこと」

誠「気にしてないよ。めでたい話じゃないか」

京極「ごめん」

誠M「京極が謝ったのを見たのは初めてだった。

京極のこれまでの俺に対する優しさ、

ずっと俺を守ってくれた」

誠「京極、ちょっと良いか」

○南武高校・屋上（朝）

屋上で誠と京極、横並びに立つ。

誠「お前、なんか悩んでることないか」

京極「お前と仲直りしたいってことかな」

誠、笑う。

誠「お前、どこまでもかっこいい奴だな」

京極「そんなことないよ。悩みもいっぱいだ

お前みたいに頭良くないし」

誠「京極、ありがとう」

誠、屋上からの景色を見る。

京極「なにが？」

誠「いや」

京極「なんだよ」

誠、京極が赤く光ってみえる。

誠「お前は本当に良い奴だよ」

京極、照れる。

京極「あらたまってそんな」

チャイムが鳴る。

誠「授業が始まるぞ」

京極と誠、屋上を一瞥して階段を下りていく。

京極、階段を下りていく。

誠、止まっている。

誠「京極！」

京極、振り返る。

スマホを見る誠。

殺人事件の速報。

写真を見る。

容疑者写真の女が赤く光っている。

スマホを閉じる誠。

誠「また連絡する」

京極、下りていく。

京極「急げよ」 n

誠、スマホを見る。

スマホを持つ手が震えている。

○電車

誠、電車で本を読んでいる。

電車が止まる。

電車の入り口が開く。

赤く光った中年の男が入ってくる。

誠、緊張した表情。

赤く光る中年の男を避けるように車両を移る。

車両をどんどん移る誠。

悲鳴が遠くからする。

後ろを振り返ると大勢の乗客が逃げている。

誠、後ろを振り返りながら逃げる。
たくさんの人が我先にと逃げる。

呆然とした表情。

車両は緊急停止。

窓を開けて逃げ出す乗客。

それに続いて逃げ出す誠。

電車内は大混乱。

○電車・外

乗客が逃げている。

座りこんでしまう人も。

振り返って電車を見る誠。

電車の窓に血痕。

恐怖の表情の誠。

○誠の家・玄関（夜）

誠、家から帰ってくる。

まなみ、誠を見るなり抱きしめる。

誠、おびえた表情。

まなみ「大丈夫。怪我はない」

誠「…大丈夫」

まなみ「良かった。本当に」

誠「お母さん。俺なんか勘違いしてた。学校

もう行けないかも」

まなみ「明日は休みなさい。こんな状態では
いけるわけない」

誠「明日じゃなくて、ずっと」

まなみ「ずっとって」

誠「…とりえあず横になるわ」

まなみ、誠を心配そうに見つめる。

○誠の家・誠の部屋（夜）

誠、スマホを見ている。

今日起きた無差別殺人事件の記事。

電車内の中年男の顔。

容疑者の写真、中年男の顔が赤く光って
いる。

京極のライン『大丈夫か？』の文字。

ラインを開く誠。

『大丈夫。そっとしといて』と打ち込

む誠。

ラインの音。

京極のライン『分かった』の文字。
既読にする誠。

○誠の家・誠の部屋（朝）

ノックするまなみ

ドア越しに、

まなみ「大丈夫」

誠「そつとしといて」

まなみ「今日は学校休んでいいからね」

誠「…わかった」

まなみ「お腹空いたら言って。今日は私も仕事休むから」

誠「そつとしといて」

誠、布団をかぶって震えている。

○誠の家・リビング

テーブルに置かれた昼食。

それをじっと見ているまなみ。

誠、入ってくる。

まなみ「大丈夫」

怯えた表情の誠。

まなみ「…」

誠「大丈夫」

まなみ「ご飯食べれる」

誠「食べてみる」

テーブルに座る誠。

昼食を食べる誠。

沈黙。

誠「お母さん。俺、推薦無理かも」

まなみ「ショックなんだよね。分かるわ」

誠「命には代えられない」

まなみ「どういうこと」

誠「信じてもらえないかもしれんけど」

まなみ「良いから言いなさい」

誠「俺最近、殺人鬼が赤く見えるようになった。

信じてもらえんかもしれんけど」

まなみ「それで」

誠「俺のクラスに殺人者がいる」

まなみ「殺人を犯した人がいるってこと」

誠「そうじゃないと思う。たぶんだけどこいつか殺人をする人」

まなみ「それがクラスにいるってこと」

誠「そう」

まなみ「そうなんか」

誠「信じてくれる」

まなみ「∴」

誠「俺、お母さんを安心させたいのと、もしかしたら将来良いことあるかもって学校行ってたんだけど、ちょっと∴」

まなみ「もう行かんでええよ。お母さん、その話、信じる」

誠「信じてくれるの」

まなみ「お母さんが誠のこと信じなくて誰が信じるの」

安心した表情の誠。

昼食を食べだす誠。

それを見ているまなみ。

○誠の家・誠の部屋（昼）

誠、スマホを見ている。

検索サイト、高校三年 転校の文字。

誠、ため息をつく。

○誠の家・リビング（夜）

夕食が置かれている。

まなみ、座っている。

誠、入ってくる。

誠、黙って夕食を食べる。

誠「あんな、転校考えてる」

まなみ「そうか」

誠「反対せんの」

まなみ「誠のしたいようにしたら良い」

誠「今のこの時期に転校できんのは、通信制

だけみたい」

まなみ「そうか」

誠「転校してもたぶん卒業、半年遅れる」

まなみ「仕方がないね」

誠「俺、どうしたらいいかわからん」

誠、泣き出す。

まなみ「あんなことがあったんだから、気が動転しても無理ないわ」

誠「ごめん。学校には行ける気がしない」

まなみ「行かなくていい。学校行かなくなつて大丈夫」

誠「大丈夫じゃないよ」

まなみ「大丈夫。なんとかなる」

泣きながら、

誠「お母さん、ありがとう。ありがとう」

泣きながら夕食を食べる誠。

優しい表情のまなみ。

○誠の家・誠の部屋（朝）

ベッドで寝転がっている誠。

京極からラインが入っている。

『久しぶり。一週間経つけど大丈夫？』
の文字。

ラインに文字を打ち込む誠。

『大丈夫。でも急なんだけど親の都合

でたぶん転校する』

『電話良いか』京極のライン。

『そつとしといて』誠のライン。

『転校してもずっと親友だから』京極の
ライン

複雑な表情の誠。

『ありがとう』誠のライン。

誠、京極のラインをブロック。

誠、京極のラインを削除。

スマホを見る背中越しの誠。

誠、ベッドを何度も何度も殴る。

誠、声を殺して泣く。

○南武高校・教室

京極が、後ろを振り返りながら誠のいる
はずの空席を見ている。

みのり「京極君」

京極、振り返る。

みのり「最近、元気ないね」

京極「そんなことないよ」

みのり「なんでも話して」

京極「そんなこと出来ないよ」

みのり「……」

京極「誠にとって俺はどんな存在だったのかな？」

みのり「京極君のこと好きだったと思う」

京極「どうして？」

みのり「京極君やさしいから」

一瞬、暗い表情になる京極。

京極「俺もだけどね。人間が分かってないよ」
みのり「……」

○道

自転車を漕いでいる誠。

制服が変わっている。

人影まばら。

赤く光る人はいない。

○通信制高校・教室

生徒たちが座っている。

誠が入ってくる。

赤く光る人はいない。

浮かない表情の誠。

○誠の家・リビング

くつろいでいる誠。

インターホンが鳴る。

京極がカメラに写っている。

居留守を使う誠。

誠、震えている。

インターホンが何度も鳴る。

京極、帰ろうとしない。

声を潜めて隠れる誠。

京極、帰っていく。

安堵の表情の誠。

誠「なんで俺ん家、知ってんだよ」

手紙が投函されている。

○手紙

手紙を見ている誠。

京極「私は実はいじめられっ子でした。中学
校までは。誠がいじめられていた時、私は
助けることしか考えませんでした。特に友情
はありませんでした。でも普通にごはんを一
緒に食べたり、遊んだり、私は同じ境遇の誠
と一緒にいて理屈抜きに楽しかった。

誠がどう思つか分からないが、私はかっこ
いい人間ではありません。誠は僕をいつもか
っこいい人間と言ってくれたこと。とても
嬉しかった。誠が幸せでありますように。私
は誠が思ってくれているかっこいい人間で
はなくずるく嫉妬深い人間です。誠、僕のこ
とを親友と呼んでくれてありがとう。体は大
切に。ありがとう。京極剛」

○誠の部屋

誠、手紙を読んでいる。

誠「京極、俺のほうこそ、俺のほうこそ、あ
りがとうを言わなきゃいけないのは俺のほ
うだよ。弱くてごめん。弱くてごめん」

誠、手紙に涙をぼろぼろと垂らす。
鼻水をすすする誠。

手紙をポケットに握りしめる。

○誠の家

ドアを勢いよく開ける誠。

エレベーターに向かって急ぐ。

○エレベーター

誠、ボタンを何回も押す。

エレベーターなかなか来ない。

階段に向かう誠。

○階段

誠、階段を全速力で降りる。

辺りを探す誠。

○マンション・エントランス

誠、辺りを見回しながら京極を探す。

○歩道橋

辺りをきよろきよろしている誠。

赤い人はいない。

歩き出す誠。

歩道橋を登る誠。

長井が待ち伏せしてる。

長井「探したぜ」

誠、少し驚く。

誠「なんだお前か」

長井「ビビらねえんだな。いつもビビッてたのに」

誠、無視してすれ違う。

長井「キモッ」

誠、無視して通り過ぎる。

長井、したり顔。

○南部高等学校・トイレ（回想）

長井がへらへら笑っている。

誠、トイレを済まして出ていこうとする。

長井「お前は本当根性なしだな」

誠「……」

長井「中学の時からずっとなに言っても、びび
ってるだけだった」

誠「…」

長井「お前みたいな人間をなんていうか知って
るか？」

誠「……」

長井「弱い人間って言うんだよ」

誠「……」

長井「みのりのこと好きなんだろう？お前みた
いな奴が好かれるわけない」

誠、トイレから出ていく。

○歩道橋

長井、笑っている。

長井「なんだよ、京極にみのりとられて学校
から逃げ出すのか？ダッセエ。お前みたいな
ヤツはどこ行ったってキモがられるだけだ
よ」

誠「……」

長井「お前は京極の金魚のフンだ。お前は。俺は群れて安全圏にいる人間が一番嫌いだよ」

誠「俺な。お前が嫌なやつまっしぐらだったら良かったよ」

長井「……何言ってるんだよ」

誠「お前が嫌な奴だけだったらこんなに」

誠、拳を握りしめる。

突如、反転して長井を突き飛ばす誠。

長井、歩道橋から転げ落ちる。

階段落ちする長井。

長井、動かない。

誠「……」

長井、動かないまま

野次馬が寄ってくる。

誠、走り出す。

しばらく歩道橋の上から長井を見る誠。

救急車のサイレンの音がする。

逃げ出す誠。

○誠の家・玄関

誠が入ってくる。

誠、表情曇っている。

誠、ドアを開けたものの、また引き返す。

○歩道橋

野次馬がたくさん集まっている。

誠がやってくる。

警察がたくさん。

現場検証している警察。

青ざめる誠。

男B「なんかここで殺人があったらしい」

男C「物騒な時代だな」

白線で人間の形。

誠、逃げ出す。

○道

走っている誠。

○誠の家・玄関

入ってくる誠。

すぐ鍵を閉める誠。

青ざめた表情の誠。

○誠の家・誠の部屋

震えている誠。

スマホを見る誠。

○誠の家・玄関（夜）

鍵穴が回る。

まなみ、帰ってくる。

まなみ「ただいま」

まなみ、リビングに向かう。

○誠の家・リビング（夜）

まなみ、入ってくる。

まなみ「ただいま」

ここからまなみの一人称視点。

あたりを見回すまなみ。

まなみ「誠、帰ってるの」

誠の部屋に向かう。

○誠の家・誠の部屋（夜）

ドアをノックするまなみ。

まなみ「誠、いるの」

誠、返事しない。

まなみ「開けるよ」

ゆっくり開けるまなみ。

赤い光。

ベッドにくるまつている誠。

まなみ、赤く誠が見えている。

まなみ「どうしたの」

誠、震えている。

誠を優しく抱きしめるまなみ。

誠、まなみに寄りかかる。

○産婦人科病院（回想）

まなみ、生まれた赤ちゃんを抱く。

生まれた赤ちゃんを見るまなみ。

赤く光っている。

女B「おめでとうございます。元気な男の子ですよ」

誠を強く抱くまなみ。

○公園（回想）

五才ぐらいの誠が自転車に乗る練習をしている。

補助輪をはずしているまなみ。

まなみ、誠が赤く見えている。

○小学校・校門前（朝）（回想）

入学式の看板。

六歳の誠とまなみ、写真を撮る。

誠、赤く光っている。

○中学校・校門前（朝）（回想）

卒業式の看板

15歳の誠とまなみ、写真を撮る。

誠、赤く光っている。

○誠の家・誠の部屋（夜）（回想戻り）

まなみ、誠を抱いている。

まなみ「どうしたの」

震えている誠。

まなみ「大丈夫、お母さんがいるから」

誠「…」

まなみ「話してみて」

重々しい口調で、

誠「カッとなって」

まなみ「腹を立てることってあるよね」

誠「突き飛ばして」

まなみ「うん」

誠「そしたら動かなくなっ」

まなみ「そうか」

誠、まなみの眼からは赤く光っている。

誠「もしかしたら殺してしまったかも」

まなみ「そうか」

震える誠。

背中をさするまなみ。

誠「とんでもないことをしてしまった」

まなみ「そうなんだ」

誠「赤く光ってなかった」

まなみ「なにが」

誠「自分」

まなみ「そう」

誠「赤く光ってなかったから」

まなみ、一瞬、苦い表情。

まなみ「殺した人、赤く光るんだよね」

誠、震えている。

誠「安心、しきってた」

まなみ「そうなんだ」

誠「でもそうじゃなかった。自分の勝手な推測だった。自分が考えた論理で確かじゃなかった」

まなみ「これから言うことは大事だからよく聞きなさい」

誠の眼を真剣に見るまなみ。

誠、赤く光っている。

まなみ「人間は生まれてきただけで、価値が

ある」

首を横に振る誠。

まなみ「誠が生まれてきただけで私にとって
価値があった」

誠、泣き出す。

誠「お母さん。安心させたかった。いつも心
配してた。だから安心させたかった」

背中をさするまなみ。

まなみ「ごめんな。お母さんが負担かけてた
んだね」

誠「せっかく産んでくれたのに、ごめん」

まなみ、涙が溢れてくる。

まなみ「誠、その突き落とした人にも価値と
いうものがある。少なくともその子を大事に
思っている人がいないなんてことない」

何度もうなずく誠。

それに合わせるようにうなずくまなみ。

まなみ「罪を償いなさい。人間はいつでもや
り直せる」

誠「そんなふうには思えない」

まなみ「苦しみなさい」

誠「…」

まなみ「苦しんで、苦しんで、苦しんでも逃げずに償いなさい」

誠「お母さん、怖い」

まなみ「私がいるから大丈夫」

誠、涙が止まらない。

まなみ、誠の背中をさする。

パトカーのサイレンが鳴る。

誠「逃げたい」

まなみ「生きなさい。死んで逃げたらダメ」

誠「逃げたい」

まなみ「…」

誠「お母さん、怖いよ」

まなみ、黙って背中をさする。

まなみ「誠、そろそろ警察が来る」

誠、震えている。

まなみ「何年かかっても償いなさい。逃げたら償いにならない」

誠「…」

インターホンが鳴る。

誠、よろよるとベッドから起き上がる。

インターホンがもう一度鳴る。

まなみ「いきなさい」

誠、ドアを開けて出ていく。

まなみ、誠が赤く光っている。

誠、黙っている。

まなみ、誠の背中を見ている。

誠、ドアを出る直前立ち止まる。

振り返ってまなみに対して拝む誠。

まなみ、笑っているのか泣いているのか分からない顔。

○メインタイトル「赤く光るということ」

○タイトル「10年後」

○海

海の波が引いたり流れたりしてる。

京極と誠が海を見ている。

誠、木の棒を持っている。

誠の目には京極が赤く光って見えてる。

京極に対して、木の棒でちょっかいを出す誠。

誠と京極はじゃれあっている。

誠と京極、満面の笑み。

誠と京極、笑いながら海を背にして、戻ってくる。

誠と京極、談笑しながらどんどんクロージアアップされていく。

一人の5歳の男の子の歩いている背中。ぐるっとカメラが回る。

27歳になった純が、かがんで息子を手招きしている。

純の傍らにはニコニコと笑う若い女性。

○図書館

横山誠（28）が勉強している。

涼みに来ている人がちらほら。

セミの音がうるさい。

ノートにびっしりと文字を書く誠。

○横山家

誠が家に帰ってくる。

まなみ「おかえり」

誠「ただいま」

誠、靴を脱ぐ。

誠「やっぱり大変だ」

まなみ「当たり前だ。生きるってのは誰でも難しい」

誠「うん」

まなみ「頑張れ」

誠「というかお母さんどこ？」

まなみ「今、料理してるところ」

誠、辺りを見渡す。

まなみの姿は見えない。

まなみ、フライパンを持ってひよっこり

顔を出す。

誠、微笑む。

誠「これからが大変だ」

○山

まなみと誠、山を登っている。

山頂にまもなくつく。

まなみ、山頂につく。

誠を見る。

誠も到着。

まなみ、山に向かって拝む。

その姿をじっと見続ける誠。

そつとまなみを拝む誠。

まなみ、誠が自分に拝んでいることに気づかない。

おわり